

4 五条坂と登り窯

4-1 五条坂の変化

小林真以

はじめに

「ここが五条坂だということを知ってもらわなあきまへん。」五条坂で陶磁器販売の小売店舗を持つほとんどの人がこう言う。

五条坂とは東山麓に近づくにつれ傾斜を帯びていく五条通のことを指す。しかし、それは同時に「やきものの町」という商業的意味も指す。傾斜という地形的特徴から五条坂の範囲を定義することは難しいが、商業的特徴から定義するならば、大和大路より東、五条通りと茶碗坂とが交差する辺りまでを指すのが相応しい。

しかし、観光客の足は、東大路通より東の五条通り、あるいは茶碗坂や、清水坂などに偏り、その麓にある五条坂の知名度は低い。清水寺に参拝するついでに五条坂でやきものを見て帰ろうと東大路通を越えて西へ来る観光客はまずいない。

I やきものの町五条坂の現状

先に述べたとおり、五条坂境界はやきものの町という特徴を持つ。五条坂は京焼・清水焼の一大産地であり、数々の工房が並ぶと共に、それを販売する卸・小売店舗がひしめき合っている。京都市内で陶磁器販売店がこれだけ並ぶ地域は他に無い。

五条坂境界の陶磁器業者の分布を調べると、陶磁器製造工房や、卸・小売店舗は五条坂に留まらず、清水坂、茶碗坂まで広がっていることが分かる(図1)。さらに、卸・小売店舗と製造工房の分布の具合から、五条坂境界は6つのエリアに分けることができる。

以下にエリアごとの特徴を記す。

①東大路通以西の五条通北側

「うなぎの寝床」(注1)のように奥行きのある老舗の卸・小売店舗や有名作家の自宅兼工房が多く立ち並ぶ。しかも、ほとんどの店舗・工房が五条坂に面しており、その件数以上に「やきものの町」の雰囲気を感じさせる(写真1)。

②東大路通以西の五条坂南側

卸・小売店舗は少なく、作家・陶工の自宅や工房が点々と数多く立ち並ぶ。入り組んだ小路に看板も暖簾も出していない大小様々な工房・店舗が並ぶため、住宅地の雰囲気が強い。

③東大路通以东の国道一号線南

卸・小売店舗は全く無く、工房がまばらに並ぶ。②同様住宅地の色が濃く、道も入り込んでおり、京都らしい碁盤目の道という印象を全く与えない。

④東大路通から茶碗坂にかけての五条通と、茶碗坂

うなぎの寝床のような卸・小売店舗・ギャラリーが転々と並ぶ。茶碗坂は、作家・窯元の工房が多く、清水寺への裏道でもあり観光客の往来も多い。

⑤茶碗坂から清水坂にぶつかるまでの五条坂

海老屋龍山一店舗があるだけで、陶磁器関連の建物は他に無い。住宅地の雰囲気をやや

残しつつ、観光客相手の飲食店が多く立ち並ぶ。

⑥清水坂

朝日堂のような老舗があると同時に、お土産屋の一角にひっそりと京焼を置く店舗や「窯元」と掲げながら工房がある様子が見受けられないような店舗もある。全体的には観光客で賑う、土産屋の多い通りという雰囲気である。

④、⑤、⑥のエリアが、観光客でそれなりの賑わいを見せているのに対し、①、②、③、のエリアはひっそりとしている。②、③は生産地という地域柄、観光地にならないのは当然であるが、老舗店と有名作家の工房の立ち並ぶ①のエリアがひっそりしているのは何故なのか。本稿では、この①のエリアが現在に至るまでの歴史的過程について述べる。そのため便宜を図り、大和大路通から東大路通までの五条通のことを「五条坂」と記す。

Ⅱ 冥界への入り口

1) 鳥辺山

五条坂はやきものの町と同時に、埋葬地としても知られている。正しくは、五条坂東に位置する「鳥辺山」が埋葬地なのだが、五条坂の傾斜が鳥辺山に近づくにつれて急になるところから、五条坂は開発される以前、鳥辺山の一部であったことにほぼ疑いが無い。

「天長 3 (826) 年、鳥辺野 (注2) に恒世親王、俊子内親王を葬る」 (注3) とあり 9 世紀には葬送の地となっていたことを伺い知ることができる。また、「鳥辺山が墓地となったのは、南北朝時代の廉永 2 (1343) 年、日尊上人が生前に逆修塔 (注4) を立て、墓守り寺を造営し、隠坊 (注5) から土地の支配権を買収したのに始まる。中世には京都五箇所の大規模な火葬場 (注6) の 1 つであった」 (注7) ともあり、13・14 世紀には既に大規模な京の火葬場になっていたといえる。

現在の鳥辺山は、大谷本廟 (注8) が何たるかを知らなければ、大きな池に架かる橋が雅やかにすら見えてしまう。大谷本廟の北脇を走る五条坂を上がれば清水寺に通じ、常に観光客の賑わいを見せている。しかし、大谷本廟北脇から延びるもう一つの小道を上がっていくと、想像を絶する数の墓石が並び、鳥辺山全体が長い年月の間埋葬地であり続けたことを感じさせる。

2) 六道珍皇寺

五条坂にはこの地が冥界への入り口として考えられていたことを示す伝説も残っている。

東大路松原に位置する「六道珍皇寺」は、9 世紀頃、国家鎮護のために建立された。京都の人々から「六道さん」の呼び名で親しまれているこの寺には、「平安初期の政治家でもあり、学者・歌人でもある小野篁 (802~852 年) が夜は本堂背後にある井戸を通り冥土の閻魔庁に勤めていた」 (注9) という伝説が残っている。この寺には、他にも冥土までその音が響くといわれる銅鏡もあり、冥界と現世の接点であると考えられていた。

8 月 7 日~10 日には、ご先祖様の魂を迎えに、近隣の人々が六道珍皇寺を訪れる。多くの人が五条坂界限を行き来するということから、この 4 日間は地元陶磁器販売業者だけではなく日本各地の業者が集まり露店でやきものを販売する「陶器祭り」が開かれる。この四日間が一番五条坂は「やきものの町」らしくなる。商業イベントは地域に密着してその効果をますます大きくするものである。場所柄この寺はやきものと不思議な関係を結んでいる。

3) 六波羅・轆轤町

寺や墓地のように形こそ残っていないが、地名からも、五条坂界限が埋葬地であったと知ることができる。

大和大路松原にある六波羅蜜寺（注10）の辺りのことを「六原」（注11）といい、その一面に「轆轤町」という町がある。六原の語源は、「昔この辺りからおびたしい人骨を掘り出したために『髑髏原』と呼ばれ、これが転訛して『六原』になった」と言われている。

轆轤町の語源も「髑髏町」が転訛したという説があり、この地が埋葬地として認識されていたことは確かである。

稲坊・閻魔・髑髏、どれをとってもまがまがしいことこの上ない。現在「東山」を指せば、「雅やかな京都」を連想するが、京都であろうとも五条坂界限が洛外である限り、雅やかさを望むことはできない。

小野篁の閻魔庁役人の伝説もこの辺りが大規模埋葬地として洛中の人々から恐れられていたために生まれたのであろう。いずれにせよ、五条坂の歴史は「冥界への入り口」というまがまがしい雰囲気からスタートする。

Ⅲ 五条坂の開発 1

1) 平氏一門の邸宅建設

この五条坂界限のまがまがしさい雰囲気をもっと変えるのが平氏一門の邸宅建設である。

平安末期になると六原の広範囲に平氏一門の別宅が建てられる。「盛時には、4町、屋敷は120余宇、一族郎等まで数えると、3200余宇にのぼった」（注12）ともある。

この地に邸宅が集中したのは12世紀初めといわれているにもかかわらず、この邸宅や当時のこの地域の様子を示す町名は現在にも残っている。池殿・小松・門脇・三盛・北御門・西御門・多門・弓矢を冠した町名がそれに当たる（注13）。

2) 六波羅探題

次にこの地が大きな変化を遂げるのは、承久3（1221）年のことである。

承久の乱（注14）に入京した鎌倉幕府の北条泰時は平家一門の邸宅のあった跡に六波羅探題を設置し、反対勢力の監視を行った。この六波羅探題の設置により、周辺には次第に武士・被管人（注15）・家人などの宿所が増加していったと言われている。この頃、六波羅は「鴨東の地」とよばれる独特の政治地区であったようだ（注16）。

平氏一門の邸宅は、六波羅蜜寺周辺に渡り、六波羅探題は現在の南北は松原通から七条通、東西は大和大路通から東大路通の辺りまで広がっていたと推測されている。おそらく、この平氏一門の邸宅建設と六波羅探題の設置を通じて、東大路通以西の五条通界限が鳥辺野という埋葬地のイメージから独立したのであろう。

Ⅳ 五条坂の開発 2

元和3（1333）年足利尊氏の攻撃により六波羅探題が滅亡する。その後耕地化されていた五条坂界限に豊臣秀吉の大仏殿方広寺の建設によって再び転機が訪れる。

京都市が編集した『京都の歴史』では、大仏殿方広寺の建設がこの地域にどのような影響を与えたかについて次のように述べている。

秀吉は天正16（1588）年に三十三間堂北を大仏殿の造営地と定めて、大々的に工

事を起こし、諸大名に普請（注17）の手伝いや用材の提供を求めるとともに、上京・下京の町衆たちをも借り出して、下行物の餅や酒を運搬させ、踊りや鳴り物入りの饗宴が繰り広げられた（注18）。

この地域には大仏殿建立に関する地名も残っている。鐘鑄町は、大仏殿の巨鐘を造るための池があったことからこの名が付けられ、跡地と言われる小さな池が陶磁器卸・小売店「田村菜山」に未だ残っている。北棟梁町・下棟梁町・西棟梁町も大仏殿建立時工廠の場であったためにこの名が付けられたと伝承されており、五条坂南全体が大仏殿建設に沸きかえていたことが分かる。

江戸時代の京都絵図にも大仏殿はこの辺りのシンボルのような大きさを描かれており、その存在の大きさを窺い知ることができる（図2）。

今となっては、この地到大仏があったことを知る人は少なく（注19）、京都国立博物館の脇にひっそりと建っているような雰囲気すらあるが、大仏建立がこの地に与えた影響は計りえない。

そもそも「五条通」を現在の位置に変えたのは、大仏建立によるためであった。

現在五条通と呼んでいる通りは、豊臣時代以前は「六條坊門通」と呼ばれ、現在の松原通が五条坂と呼ばれていたという。しかし、大仏殿と洛中を結ぶために当時の五条通り（現・松原通）に架かっていた五条橋を天正18（1590）年（注20）、六條坊門通に移した。この際、橋の呼び名は「五条橋」と変わらなかったために、六條坊門通は五条橋通と呼ばれるようになったと言われている。

現在の五条坂界限の基盤が出来上がったのはこの頃であろう。『橘窓自語』に「その後、二条城の造営にあたり、二条城の工事地を空けるために、住人が強制的に転居を余儀なくされた際、その転居先が五条坂界限に決まった」（注21）という内容が書かれているが、これは秀吉時代の開発により、五条坂が拓け、ある程度この地が住みやすい場所になっていたからであろう。

V 陶磁器産地となるためのポテンシャル

秀吉の開発によって、「稲坊・閻魔・髑髏」というまがまがしい雰囲気が大分薄まり、慶長・元和（1596～1623）の頃になると、ついに音羽・清閑寺・小松谷・清水などで、製陶が始まる（注22）。当初は、山の上に窯場があったといわれているが、「慶長3（1598）年、阿弥陀ヶ峯（注23）に豊国廟を築くとき、窯煙が廟を覆うとして、窯を五条坂に移した。あるいは、慶長18年（1613）方広寺の巨鐘を鑄る際に窯を五条坂に移した」（注24）とも言われる。

五条坂界限が窯場になった理由は解明されていないが、傾斜が登り窯を立てるのに必要であったことと同時に、この地は様々な職人が住む地であり、新たに陶磁器職人が入ってきやすい場所であったためではないか。職人が多く住んでいたことは現存の職人にまつわる地名からも知ることができる。例えば、鞘町は、刀・脇差の鞘師や、刃物鍛冶などの職商が軒を並べる特殊な町だったために鞘町と呼ばれ（注25）、下梅屋・上梅屋町にはやかん職人が多かったため、やかん町と呼ばれている。文献こそ見つからないが、五条坂界限には鍵屋町・漆師屋町・東瓦町・瓦役町・金屋など、職人と関係があると予想できる町名は他にも多くある。

五条坂に面している辺りは「やきものの町」という印象しか受けないが、陶磁器産地になるまでには様々な職人がこの地で商いをしていた。それはこの地が、大仏建築で開けたとはいえ、すぐ脇には鳥辺山があり、まだまだ裕福な階層が住む地域ではなかったためであろう。鳥辺山の脇には牢の谷（注26）と呼ばれる地域（地図1）もあり、清水門前、清水坂は参拝人の施しを目当てに、乞食・非人が集住していたという（注27）。

陶工の地位は明治頃までは極めて低く、五条坂には「つんぼ谷」（注28）と呼ばれる陶工の居住区さえある。陶工は登り窯の音を聞き火を見、盲目になったり耳が聞こえなくなったりすることも多かったために付けられた名であるようだが、陶工の地位が高くなかったことをよく示している。このように五条坂は、決して地位の高くない陶工が住みやすい地域だったのではないだろうか。

VI 五条坂の開発 3

16、17 世紀から始まった陶磁器生産も 19 世紀には磁器製作の本格的導入もあって、五条坂はやきものの町として勢いを見せる。幕末、明治初期の段階では、五条坂には 38 軒ものやきもの屋が軒を連ねたという（注29）。

この後の開発はまず明治から大正時代にかけての東大路通の開通が挙げられる。柳町敬直によれば「東大路通りの基礎は四条通りの祇園石段下から北へ白川に抜ける小堀通。^{こつぽりどおり}（略）明治 45 年拡張、大正 2 年 3 月、東山通と命名、小堀の名前は消えた」（注30）という。幹線道路ができたことは、五条坂にますますの発展を与えた。この時期に、それまで竹やぶであった東大路以東が宅地化され始めるのは、東大路通の開通が大きいと推測される。

VII 五条坂の開発

1) 強制疎開

やきものの町として勢いのあった五条坂の姿が変わっていくのは戦時中のことである。その様子を大管直は以下のように述べている（注31）。

十九年六月にはサイパン島が陥落し、以降前項各都市への空襲が日常化する。京都でも二〇年一月に東山区馬町付近が爆撃（注32）を受け、「京都大空襲」の恐怖は市民の間に差し迫った現実問題として認識されることとなった。

このような差し迫った情勢を受け、十九年七月、防空法により「建物疎開」の対象区域が市内各地に定められ、以後四回に分けて対象箇所が指定されることとなった。建物疎開とは、木造家屋等が密集した市街地が空襲を受けた場合に備え、空地を適宜設けることによって延焼の被害を最小限に抑え、あわせて消防車が河川に接近できる道路や防空壕、貯水槽など用地を確保しようとするものであった。（中略）

三月一〇日には東京大空襲が起き、これを受けて同十八日には第三次指定として、それまでとは比較にならない広い範囲が疎開の対象となった。（中略）

しかし中でも象徴的であったものは、市中心部における幅六〇メートルの「疎開空地帯」の指定であった。これらは中心部の既存街路のほぼ中間を縦横に貫くように計画され、八条通、五条通、御池通、堀川・紫明通の四路線に白羽の矢が立てられることとなった。

この第三次疎開は、対象の三六三〇〇〇坪、一四七五戸をわずか三日間で撤去す

ることが至上命令とされ、町内会、国防婦人会（注33）、勤労学生、警防団（注34）といった地域の人々が総出で作業にあたることとなった。家屋の柱にのこぎりで切れ目を入れ、ロープで引っ張って倒すという強引な方法だったが、立派な町屋が多かった五条通などでは、軍隊も応援に駆けつけて除去作業にあたった。また、指定から作業開始まで十分な時間がなかったため、まだ行き先が決まらないお年寄りが奥でうろうろしているのに、表から家を壊していくような状況であったという。

五条坂の南側が北側の風景と異なっているのはこの強制疎開（注35）のためである（図3）。

『思い出の五条坂』に戦前、昭和初期の五条坂の家並みが記憶をたどりつつではあるが描かれている（図4）。これをみると、五条坂に面する建物は、北と同じく陶磁器小売店が多かった。強制疎開前の五条坂の道幅は6メートルほどで、北も南も陶磁器小売店が多く立ち並ぶ。どれだけ風情があったであろうか。どれだけ「やきもの町」であったであろうか。強制疎開は五条坂の陶磁器の街の顔を半分切り取ってしまった。もし、あと半年戦争が終わるのが早ければ、五条坂は違うものになっていたはずである。空襲を受けたわけではないのに五条坂の半分は崩壊してしまった。

2) 国道一号線・東山バイパス

戦時中・戦後と、疎開地には畑が広がり、窮乏下の市民の貴重な食料供給源となっていたという（写真4）。戦時中ならまだしも、戦後何故土地は下の持ち主に返されなかったのか。それは内務省が戦後間もない9月に疎開跡地を都市計画用地として活用できるようにするため、戦後もさしあたりそのまま保持するように支持したためである。即ち、跡地を都市計画街路にしようという計画であった。この計画によって作られた道路が、「五条・御池・堀川・新町・知恵光院・壬生川・七本松・高辻など」なのである。

この計画の柱が、疎開後地を都市計画街路として整備することだった。（中略）五条・御池・堀川通は各五〇メートル幅の幹線道路（注36）として再生されたほか、新町、知恵光院、壬生川、七本松、高辻通など、市内各地に設けられた消防道路は幅一メートルの補助幹線道路として整備された。これらの道路のうち多くは、従来から計画されていたものの、密集市街地ゆえ着手できていなかったものだったが、はからずも戦争という非常事態によって、京都の既存市街地の街路網は格段に改善されたのであった（注37）。

このようにして着手された五条坂の幹線道路、即ち国道1号線建築は22年に整備工事が始まり、28年に一応の完成を見る（注38）（写真5）。さらに昭和34年には一日三万三千台ともいわれる国道1号線の市内交通を緩和するため国道1号線東山バイパスの着工に入り、昭和42年4月20日に開通する。4月20日付けの新聞では以下のように報じられている。

「京の新動脈 東山バイパス開通 混雑緩和へ始動 喜び乗せパレード」

山科、三条、東大路など、大型車の大量通行で事故の危険と公害になやまされてきた国道一号線沿いの住民はこれで一息つけることになるが、自動車の増加量は道路建設の速度を上まわっており、数年でまた元の状態に戻ることが予想される（注39）。

この記事からも、陶磁器業関係者にとっては強制疎開で五条坂南側を失った時点で切ない思いであったと思われるが、その他の住民にとっての東山バイパスの開発は喜びであったと分かる。

こうして、五条坂は現在の姿に至る。どうして五条・御池・堀川は六車線もあるのか。この六車線は壊した人家の上に立っているからである。五条坂の場合は、陶器の街の上に立っているからである。しかも、その上に立ったものは観光バスや大きなトラックが走る高架道であった（写真5・6）。

VIII 五条坂に暮らす人にとっての五条坂の変化

戦前、強制疎開時、国道1号線・東山バイパス建設後、それぞれの五条坂の変化は、実際五条坂で陶磁器関連業に携わる人にとってどんなものであったかを知るため、五条坂北側に店舗を構える木村寅之助商店店主の木村隆一氏に五条坂の移り変わりについてお話を伺った（注40）。店舗の中に入っても国道1号線を走る車の音がとても大きくテープで音をとることが困難に感じた。

1) 五条坂の現状

「雑音だらけやろ。なんやったら（戸を）閉めてくれてもかまわんよ。」

店の前に観光バスが止まることは多いんですか。

「そやね。というのはね、六波羅蜜寺があるからなんですよ。そこいく人が多いんですよ。清水の駐車場が満杯やと、ここでバスを止めて歩いていかはるわけや。六波羅蜜寺も、清水さんへもやね。そんでね、それ行かんなんねんから、ここいらに用事はないやん。まず行かんなんやん。だから、ぎょうさん人が降りる割には商売にはなんわ。」

ここが五条坂っていう認知度はやっぱり低いんですか？

「う～ん。それがどこまで（が五条坂で）どういう風に言われてるのか……。五条坂というのはある説によると、大黒町通りからが五条坂って言わはる人もおるわね。それと、この大和大路から東が五条坂言う人と、二通りおるわね。あと、東大路の角に石屋があって、その前に木札が立ってんねん、京都市の。あれによると、大和大路から東で、清水坂までが五条坂やて書いてあるし（注41）。

だから色んな説があるんだけど、僕等が昔の人に聞いてる中では、やっぱり東大路の辺りまで、まあ精々そのちょっと上の辺りまで、ってことになるわね。というのは、昔は清水坂は竹藪やったからね。もちろん松原通の方が拓けてたんやね。」

2) 東大路通より東の五条坂界限

今話に出ましたが、ちょっと上がった五条坂といたしますか、茶碗坂といたしますか、あの辺りが竹藪から開発されたのはいつ頃の話なんですか。

「大正の終わりか、昭和の初め頃だったと思うよ。」

じゃあそれまでは、あの辺りはお茶碗のお店だったり、観光客相手のお店だったり全然なくて、本当に竹藪に人力車が通るって感じだったんですか？

「そうそう。でも、今、清水寺の門前の際に「朝日堂」ってあるでしょ。大きいところ。向こうはもうあったらしいよ。松原から上がったところね。」

じゃあ、松原から清水寺にあがったところは明治の前から開発されてたんですね（図5）。「そうそう。で、この辺りが、全部鳥辺野って言って風葬のところでしょ。だから、死んだ人をこの松原から上がって連れてって、埋めはったとかね。」

清水さんの前のところが観光地になったのはいつ頃ですか？今は八橋とかのお土産が売られてますけど、木村さんが子どもの頃はああいいうお店は立ち並んでたんですか？

「ないね。」

観光・観光という雰囲気になったのはいつごろですか？

「ないねって言うけど、それでも…30年くらい前かな。もうちょっと前かもしれないけど。とにかくまあ、店が増えたこと増えたこと。あの当時やったらあんなになかった。あの空いてる（茶碗坂の）辺りも、今やとびっしりありますけど、あそこそ、そんなになかった。」

一気に観光地になってしまったんですね。竹やぶだったところが。

「いや、それはね、観光地っていうよりも、住宅になったの。だから一部長屋やろ。長屋っていうか、屋根がひとつで、間仕切りしてあんの。そういう住宅を建てて、売りだはって、住み着かかった人が、商売を始めはったんか、あるいは、その人が退いて、人が入りはったんか。せやから、二寧坂でも産寧坂でもそうやけど、儲からへんから、人に貸して、商売してもろて、その家賃で生活したりね。」

清水寺門前の辺り（松原通）はどうでしたか？今一番栄えているのはここだと思うんですけど。

「ここらもそうやったと思うの。」

竹やぶだったんですね？

「うん。」

本当にあつという間の開発だったんですね。清水の上の人たちはそんなに知ってる人ではないんですね。五条坂の人たちは。

「そやな。まあ、ある程度古いところもあるけど。あの上に、岡本さんって布売ってところがあるけど。きれはしをね。そこに、今はもう、この頃写真だけしか載ってないけど、表に、古い古い暖簾が掛かってる。それはあの、いろんな布をつぎ足して、暖簾にして。それがやぶれたとかゆうて（今は写真しかないない）。まあ、そういうのがあるってことは古いつてことやね。」

う〜ん。そういう古いところも少しずつあったけど、観光地として栄えたのは最近のことなんですね。

「うん、観光地としてだったら、ほんと近年。僕等のいうの（東大路より北の五条坂や茶碗坂）はほんと静かなとこやし。」

自分が住んでいたところから一番近くの山が、開発され、竹やぶが無くなり、観光地に様変わりしていく。五条坂は住む時代によって、その景色を常に変えてきた街である。

3) 木村寅之助商店と木村隆一氏

木村さんは何代目になられますか？

「う〜ん。どこから数えたらいいのか。一番最初に(陶器屋を)やったところからだったら八代目になるかな。」

最初は伏見で商いをされてたんですね。

「うん。伏見でね。文久年間（1861～1864年）に伏見で、壺やらをやったのが始まり。その前は大工さん。初代が木村政治郎ゆうて。」

京都に移られたのは何代目の方ですか？

「えっとね、三代目かな。それこそ、ある方を頼って。もうその人は五条にいないけど。まあ、『五条ええよ』とかそんなん言われたんやろね。たぶん。『じゃあ、五条行こうか』

って。それが明治の初め。」

その頃からお茶道具を扱われたわけですか？

「うん。一時期煎茶を扱ってたりもしたけど。戦時中やったかな。そういうもんが、だんだん統制があって、あんまり煎茶もいらんようになって、茶道具中心になっていったの。」

木村さんはこのお店を継がれるまでは何されてましたか？他のお仕事の経験はありましたか？

「ないよ。その時分は高校までしか出てないから。で、なんとなく『継がんなんな』とか、なんとなく。昔って大体、『長男が継ぐもんや』とか（いう雰囲気だった）。その時分は皆、なんとなくでしょう。もちろん積極的に『してやったろ』思ってた人もいたやろうけど、僕はなんとなく。で、高校出てからいわゆる徒弟制度、丁稚制度（注42）って言ったらいいのかな。その丁稚に東京に行ってたんや。東京で二年間。そんで戻ってきたんや。」

アンケートの結果（注43）からもわかるが、五条坂で陶磁器卸を営む人の九割は「家業だから」という理由で就業している。これは木村さんがおっしゃっている通り、当時の風潮なのだろう。しかし、「継いでもいい」と、思わせるだけの力が五条坂、あるいは陶磁器にあったのではないか。それが「五条坂ええよ」の言葉にも表れているように感じられる。

4) 強制疎開と五条坂

で、強制疎開の話なんですが…

「うん、うん。強制疎開は終戦前かな。三月に家壊して、五月頃には畑にしてたかもわからん。というのは、その時分食料が無いから、自給自足ということで…。はじめはこんな前まで出んと、奥のほうだけ畑にして。あれどうしてたんかな。それこそ皆で分けはって、で耕して。で皆が段々こっち（北側）に出てきて、ギリギリまで畑になって…。それが終戦後。」

それは誰が耕してたんですか？

「いや、それはここら辺の人間が、できたら自分のところの前を少しずつ借りたんや。そんで、はじめは道の半分位まで借りてたんや。それが段々もうちょっと増やしたらこれこれができるゆうて…。(笑)」

強制疎開のときは木村さんも疎開されていたんですか？

「うん。あの、つぶれる前の、ちょうど家が皆空いてしもうて、ちょっとぐらい潰れるのを見たか見ないか位の時に行ってしまったからね。ちょうど、ここの学校が始まる四月位かな、新学期が始まるギリギリ位の時のことかな。」

軍隊が来て家を壊したと聞いていたんですが、地元の方も携わっていたんですか。

「うん。結局人が足りひんから。軍が主なんやけど、警防団（注44）とか、町内会の人やら、それから、在郷軍（注45）とかが手伝って。それから、昔の大日本婦人会なんかが。まあ、いろんな人が、手伝える人が手伝った。」

5) 疎開前の南側

（昭和初期の家並みの地図（図4）を使いながらのやり取りとなった。）

他にも強制疎開になった地区はありますが、五条坂はその中でも立派な家が沢山あって疎開に時間がかかったと伺っていますが、疎開前はどんな家がありましたか？

「大和大路から（東へもう一本次の）辻（通り）までだったらほとんど覚えてますけどね。そのブライトホールのところは萬珠堂（注46）があって、その向かいには、萬珠堂の貿易部があってね。北は萬珠堂の本店なんよ。で、その隣が、松本っていう運送屋さんや。」

それは陶器の運送屋だったんですか？

「うん。まあ、この辺やから陶器の扱いが多いわね。その時分は、今の日本通運の集荷場っていうか。ここいらの品をここへ集めて、そっからまた、どっかへ運んで。で、その隣が清水一貫堂っていう文房具屋さんやった。で、その方の家は今、松原通りにあるわ。で、その隣が中村っていう眼鏡屋さん。で、その隣が今そこにある猪飼さん。」

あ、あの猪飼さんはもともと南にいらっしゃったんですか？

「うん。向かい向かい。」

で、強制疎開になってから北に来られたんですか。

「うん。疎開になって、一回田舎にいった、園部やったかな、そこら辺に行かなくて。で、鞘町のところに戻ってきまして。で、ここが空いたんでここに来ったんです。」

で、この高山さん（注47）のところが僕が知ってるのとちょっと違う。僕の知っている時は、中野っていう、紡績のときの糸を通す小さいもんを作ってた。それから中川っていう陶器屋さんがあって、ここは卸屋さん。で、その隣は高山ってなってる。それからここが、重成っていう外科のお医者さんやってん。で、そのあとに宇野さんっていう……。今でいうたらどう言うたらいいんやろ。今は松原の近くに移ってはるわ。今でいう小間物、雑貨屋みたいな感じで。」

じゃあ、その宇野さんの時に強制疎開だったんですか？

「そうそう。で、その隣が、浜崎さん。これも卸屋さんやったわ。でそれから弁天さん。弁財天を祀ってたから、僕等弁天さんっていうんだけど。で、その家は、あの、馬町ずっと上行った、小松谷ってあるやろ、あそこの中にいはる。で、そこまでが、同じ三丁目っていうんよ。」

弁天さんは何と言うお寺ですか？

「喜運寺っていうんだけどね。戦時中、20年頃までは、ここのお祭りが月に一回あって、店が出て、この時分は露天屋さんが出て。せやから家の小売は関係ないの。うちの前は下駄屋さんやったなあ。同じように、こっちの西行くと植木屋さん、東の方行くと本屋さん。露天商が外から来て。」

東大路から大和大路まで毎月1日と15日の2回弁財天社の夜店が開かれると書いてある文献もあるんですけど、二回ではなかったですか。

「そうかもしれん、……。あはは。」

それは子供たちが楽しむものだったんですか？

「子供達も大人も楽しんでたよ。せやから、植木が売れたり。古本屋もあるわけで。で、その隣が酒見さんゆうて、今こっちで商いしてはる。どっちが本家でどっちが分家やったかな。」

あの（五条坂南側にある）酒見ガレージと言うのは…。

「うん。あれの延長が表だったの。で東陶器は、今こっちにいはるやろ。」

東陶器さんは疎開後はどうしてたんですか？

「うん。あのねえ、戦後は東さんは疎開してはって、今の（五条坂北側の）山本旅館の陶器

の売ってはるところあるやん。そこにいたの。で、色んな経緯があってここに來たの。

じゃあ、南側におられた方はある程度は散り散りになってますが、戻ってきた方もいっぱいいらっしゃるんですね。

「ある程度は戻ってきたの。」

疎開の建物が壊されている時は中にまだ人がいたなんてことも聞きましたが。

「いいえ、それはね『強制』だから。強制だから、とにかく出んとあかんわけ。家、空っぽにせんとあかんの。だから何時何時までに出なきゃいけないってなったら、まあ、うちは預かってたんかどうか知らんけど、近所に荷物を預けたり。で、まず身い一つで住むとこ探しに行かはって、それで後から荷物をとりに來たり。だから、あの、喜運寺さんはお寺の牌やらなんやかんやは、真向かいの、今そこに萬田さんっていはるけど、そこに一時預けてはったゆうたな。その時分は萬田さんと違って山下さんだったかな。」

五条坂の北も南も、当時は商店が軒を並べ、やきものの街の雰囲気があった時代であっただろう。今、木村さんは五条坂南の家並みのことをよく知っているであろうか。なぜ、疎開前のことをこんなによく覚えているのだろう。どれだけ、五条坂の北と南は近かったのだろう。

6) 学区

「で、僕等が子どものころは、ここらが一つのブロックやったんで、皆で集まって、一緒に学校に行ったの。」

京都って学区が強いですよ。

「うん、それは明治六年やったやろか。番組み小学校ってのができたじゃないですか。一番番組み小学校、二番組み小学校って。六原とかそなんじゃなくって、番号でやってたん。で、それ作ったんは、例えば、この六原も速いほうやけども、いわゆる、この学区の人がそれぞれお金出しおうて、で学校作らはったの・・・だから強い。

だから財力のあるところは立派なものができたり、(そうでもないところは) ちょっと普通の平均的なんが建ったり。」

じゃあ、逆にいえば立派な学校があるってことは周りにお金持ちがいるってことになる訳ですね。

「そうそう(笑)。そういうふうにして作っていくの。」

この辺は何小学校なんですか？

「五条坂まではね、六原小学校なの。で、この大和大路越えて二件目からは修道さん。で、もうちょっと行って旅館があつて秀峰閣(注48)かな。で、このまま西にあるけど、そこは、貞教ゆって、今はもう廃校になってるけど。だからおんなじ五条通でも…」

分かれてるんですね…。

「とにかく入り組んでるの。だから一軒隣は六原行って、一軒隣は修道行って、新道行って(ということがある)…。」(図6、7)

7) 五条坂での遊び方

そう言うのは放課後の遊びには影響しなかったですか。やっぱり学区ごとに集まって遊ぶことが多かったですか？

「ん～そんなこともないよ。ご近所だし。僕も幼稚園の時は今あの玉置半兵衛って、麩屋さんがあるな。あの辺で、遊んでたし…。

あのへん石畳だったね。いわゆるコンクリートとかそんななしに石畳。でも、それは何でだったか言うたら、問屋町って言う名の通り、色んな問屋さんがあった訳で。それで海産物とかやら扱うてはったら、絶えず水を流してはるやん。そんなために石畳だったの。」

ああそっか。土とかだったらドロドロになっちゃいますよね。その時分はやっぱり

五条坂というのは遊び場所でしたか。野球をやった思い出とかはありますか？

「いや、それは、結局、僕等の小さい時分は野球なんてまだなかったわけやん。いや、あったんやろうけど、まだメジャーやない。終戦後のいわゆる、これ（畑）になったときにぼちぼち野球が始まって。ここらで。だからこの真ん中でやってたし。

でもその時分でも、ボールがないから、いわゆる学校でやってた玉入れの玉みたいなものに。色んなもんで作ったり。だからもちろんミットグローブゆうたら布やし。」

畑になる前の五条坂ではどんな風に遊んでおられましたか。

「畑になる前の狭い五条坂では不思議に、あれ、風揚げしたりね。お姉さんやったら、羽ついたり。だけど狭いから、鬼ごっこしたり、かくれんぼしたり。そう言うことが多かったよ。」

狭いながらの遊びって事ですか？

「そうそうそう。で、めったに車って見いひんかったし。たまに救急車とか通ったら、道幅いっぱい位で。」

8) 登り窯と五条坂

で、出窯（注49）の人達が凄いいっぱい運んではったりとかしてたんですよ。で邪魔にならないように遊んだり…。

「そうそうそう。で、あの、だからあの、窯の、窯焚くゆうたら1週間以上前にまず、薪割る人が来て、きれ〜に割って、で、積まはるわけやね。」

薪を積んだトラックが、ほんと道幅ギリギリを通ってて。軒にあたるか当たらないかくらいだったて聞いたんですけど。

「で、トラックやったし、（薪が）あんまりなかったら馬車や。」（写真7）

馬車！想像が着きません！

「（集配の荷物は運送屋さんが）今だったら昼から作ったって夕方集めに来て（くれます）。

少々（の距離）のそこやったら明日つくし。それけど、終戦前なんてゆうたら、いつ荷物を集めに来るかわからへんわけや。と言うのは、まず軍が優先。で、それから、それに関する物資が優先になって、我々が最後になるから。だからそれまで、何ぼ注文聞いても積んどくわけや。ほんで、何日かしたら取りに来てもらって。それでやっと（集めに来る）。だから、注文する方もゆっくりなら、出す方もゆっくり。いや、お互いにはよ欲しいねんけど、そういう事情でゆっくりなの。で、そこへもってきて、登り窯や。あれは大体月に一回くらい焚いてたんや、戦前から戦後の頃は。まずお客さんから注文来たって（出来上がりは）一月後に出るか出えへんかはっきりわからん。二ヵ月後になるかもわからん。で、その時分は、窯に火が入って、しなもん作っても100個作っても80くらいしか（商品としては出来ない）。」

9) 陶器市と五条坂

二級品は陶器市に出回ってたんですか？まだその頃は陶器市は盛んではなかったん

ですね。

「うん。でも大正にはありましたからね。陶器市は、…陶器市と言わんと、ま、夏売りゆうて。

それは松原通の六道さんで、京都の場合はそこへお参りしはるわけや。鐘ついて、先祖の霊が呼んだげて。で、そのお参りを大体八日から十日までにする。それにあわせて、まあ（多くの人が）通らはるのにもったいないゆうて。「ほな出そか〜。」てゆうて。その時分は窯屋さんがしなもんもってきて、一級品だけはたこうて売る。二級品はよろしい、おいときますわ。それをためて、売る。で、それを売ったんはどうするかゆうたら、昔はボーナスがないから、その売り上げが何ぼかあったらボーナスとして・・・。」

じゃあ、売れば売るだけ自分にボーナスとして入るんですね！

「んで、段々と売る人が利口になってきて、家にある一級品を内緒で前に出して、安うして。とにかく、全てにおいて『のどか』っていうか。だから少々のこと、値段付けてる、付けてないゆうても（問題にならない）。」

その時期が木村さんにとって五条坂の一番いい時期でしたか。そんなこともなかったですか？

「んん。僕等は、だから、お金っていうもんやら、その頃ってまだ分からへんやん。小学校やから…。中学校になったら、（もう）こんな感じになってるから。たまに学校自体が、椅子をもって生徒をアルバイトに雇って、で売る。」

学校は何のしなもんを持って来るんですか？

「ここ、一番知ってるのやったら、洛東中学校やけど。洛東が、場所がないゆうか、家の前貸したげて。そんで、しなもん何やゆうたら、お香売ったり、そこらのもん集めてきて売ったり。原価は払うけど、儲けは子供がアルバイト代として（もらうんや）。」

と、言うことは、ここら辺の人たちも品物を出してたって事ですか。それで子供達にアルバイトで売らせてあげて、売り上げの分だけ子供にあげてたんですか？

「うん。」

でも、子供はそれで教育されてましたよね、陶器の町に住んでる、って。

「ねえ。商売人ですね。」

ここの品物を出す人達には何の売り上げも無いけど、子供達が来てやるってことは、意味のあることだから、学区の人たちが皆手伝ってあげてたってことですね。

「そうそうそう。本当は、ゆったら余分だって気がするやん。うちが仮に店だして、売れた。それは普通に売ってるのの余分の売り上げやっていう感覚やん。せやけど今は、うちもそうやけど、明日の分があるなあって…（笑）。売るわけや。で、売ったら即生活費にしたり、支払いに当てたりするわけやん。だから、そんだけ世知辛い、っていうか余裕が無いというか。

そやから、そんで、この陶器祭りも段々変わってきた。一時はねえ、テント全部揃えてたことがあるんですよ。で、それがたこうつくゆうので今の形になった。でも一つは、これだけじゃ足らんゆうて、バイパスの一車線を、一車線半をつこうて、ずーっと東山まで出して。南も、その時分は（昭和 20 何年頃）大和大路より西は（店を出して）なかったかな。」

10) 国道 1 号線バイパス建設

「戦後は南側は疎開になってるから、その後ろに、いわゆるプレハブみたいなお店がずうっ〜と西の方まで並んでた、畑の手前に。」

じゃあ、そのプレハブを動かしてまたバイパスが建ったんですか？

「そうそう。前の店が出してる場合もあれば、よそから来て出してるのもあった。だから、お魚屋さんがあったり八百屋さんがあったり。」

それは許可無くやっていたんですか？

「いえ、勿論許可を得て。でも今ほどうるさくもないし。」

で、これ（国道1号線）作んのは、ほんまの強制。いや、強制って言っても、まあ、畑があったらいついつまでに作物抜いてや。後は潰すよ。って。で、抜いてる人もおりゃ、まあええやんって言って、そのままにして、びゃ〜と潰される。」

強制（疎開）が二回あったってことですねえ。強制で家が立ち退かされて、そこにまた戻ってきた人たちや、新しくそこに来た人たちがまた強制で追い出されてバイパスが立ってるって事ですね。

「うん。まあ、それは西は期限があったんだと思うんだけどね。やっぱり予定立ててるから。何年まではつこうてもいいけれどどか、そういう約束はあったと思うんだけどね。」

二度目の強制は「徐々に」の強制だったわけですね。

「そうそう。」

11) 「職人の町」 五条坂

今職人さんの話が出ましたが、職人長屋みたいなものはあったんですか。

「いやあ、ばらばらていうかなあ……。この五条通は作家さんが多かったですよ。」

それからいわゆる職人さんゆうのは、馬町のもうちょっと下の辺りに細い通りが、やかん町ゆうのがあって、その辺りに。

上梅谷町。

「ああ、そうなってるかもしれないな。」

あと、なんの意味も全然分からないやけど、『ろうの谷』ゆうて、西大谷の下の辺りに。そやから、昔は牢屋があったとかね、いろんなことゆう人もいはるし……。まあ、そこらにも、今でも職人さんが、おられるわね。そんなでもう一つ余分なことゆうたら、その今ゆうた（西大谷の）下のところの、もう一つ下（の通り）かな。ちょっと入ったところに、お相撲さんの、横綱やら大関やらの化粧まわしやら、箱やらってあるやん。籐で編んだりしてはんのやけども。それ作ってはるところがあるわ。それこそ、東大路通りの渋谷の手前。」

つんぼ谷はご存じないですか？五条の南側に職人さんがいっぱい住んではって、皆さん目や耳を酷使しはるので、つんぼ谷と呼ばれていたと聞きましたけれど。

「ん、そこらも職人さんは住んではったし。」

木村さんが来られた時には、馬町と五条南とが職人さんの町って感じでしたか？

「うん。で、もっとゆうたら、今熊野とか泉湧寺（注50）とか、あっちの方。」

12) 現在の五条坂

バイパスできてからは五条坂の雰囲気はがらっと変わってしまいましたか。

「がらっと変わった！第一、この頃ちょっとましになったけど、そこ坂でしょ。エンジンかけなあかんわけや。その大和大路からエンジンふかすわけやん。絶えず車が通るわけ

やん。おっきいトラックが。」

う〜ん、しかも、信号があるから、そこで皆一斉にエンジンをふかすって事ですよね。バイパスになる前の五条坂は静かでしたか？

「うん、もう静かなもんよ。」

第一車が通るほどのの広さが無かったわけですね。

「うん、だから僕等が小さい時だったら山科いこうかゆうたって、自転車も何もなかったから歩いて。で山科行って遊んでみたり、たまにはそこの田んぼのサツマイモ盗んでみたり…。」

山科は何時間くらいかかりましたか？

「そんなにかかったとは思わへんにやけどねえ。やっぱり、一時間くらいかかってたんやろか。あはは。」

私たちの感覚では山科は車やバイク、あるいは、電車で行くところですが、五条坂の方の話を聞いてると「山科に行こう」とか「山科越えて京に来よう」とかいう話をすごく聞きますね。

「そうそうそう。」

13) 近隣関係

「昔は、子どもが多かったの。今みたいに小学校はいったら二人、それから幼稚園が一人だったかね。(そんなことはなかった。) 町内としてはね。僕等の時分は 15、6 人いたかな。そんだけいたら、まあ、喧嘩もすりゃあ、ねえ、悪いこともしたし。やかましく遊んでどったら『やかましい!!』って怒られるし、それで騒いでるから水かけられたり。」

なんだか話を聞いてると子どもが住みやすい町だったように感じますね。

「ほんで、そやから、町内が、皆が皆の子どもだったの。それぞれの家の子やねん。やけど、どこぞの子でも。」

半分うちの子なんですね。

「うん。だから悪さしたら怒られるし、誰でも。」

たまに、僕みたいに隣に可愛がられたゆうて。未だに、未だにですよ。言われるんのが、『(木村氏が) うちのおじいさんに一番大事にされて。うちのもらう分までもろうて帰った。』とか。」

実の子より可愛がられたって言って怒ってらっしゃるんですね。

「そうそうそう。でそれを怒ってはるのが 80 くらいの人で、ね。」

で、皆風呂なんかないから、皆で銭湯行きましょか〜みたいなことになって。で、たまに、家にお風呂がある家があつてね。そこ行って(お風呂に)入れさせてもらうとか、ね。ほんでついでにすぐ帰らんと、遊んでみたりね。」

北の人達が南の家に行ってお風呂に入ったりしてたんですね。

「うん、それはまあ、僕の話しやから、他の人は知らん言わはるかもしれへんさかいね。その、付き合い程度なわけやから。」

今より南との付き合いが強かったように感じますか？

「うん、て言うよりね、絶えず一緒やん。」

近かったから。

「うん。『今日はこんな作ったしな、向こう(南側)もって行こ〜。』『じゃあ、うちこん

なん作ったし渡そう〜。』ってね。で、それが段々無くなってきたけど、今でもたまに『今日はお彼岸やし、おはぎ作ったし、余分にあるから渡そ〜。』っゆうて。全部じゃなくて、付き合いのあるところだけやけど、勿論。」

14) 国道1号線・東山バイパスがもたらした影響

バイパスの距離っていうのは五条坂に住んでる人にとってどんな距離ですか？

「その距離はも〜っ、そりゃ本当にも〜。」

それは距離的にも、精神的にも遠くなったということですね。

「あの〜、町内が完全に二つに。これがなければこれはおんなじ町内や。そんで言いましたけど、昔は川が流れてて、その先が違う町内や。それが境界線になるわね。」

今はバイパスが境界線ですね。

「ただ、僕等が小学校の時分、東大路行くって、遠い感じがしたんや。山科は近いっていう、さっきの話と矛盾してるように聞こえっけども。そんな感じで遊んでいたんや。」

木村さんにヒアリングをしている3時間ほどの間に、救急車が4回五条坂を通った。もし、戦前の五条坂なら救急車がスピードを出して通れなかったかもしれない。そう考えれば、産業も然りだが、国道1号線の恩恵は大きいのであろう。

「その距離はも〜っ、そりゃ本当にも〜。」とても冷静にお話をされる木村さんの声のトーンが唯一強くなったところであった。五条の南は近く、東大路は遠かった。バイパスは五条の南を「遠いところ」にしてしまったようだ。我々が歩いていても、横断歩道が少なく、信号の待ち時間もそれなりに長く、北から南に渡るのは一仕事であるように感じる。現在の五条坂を歩く限りでは、数歩先にお向かいさんがあった五条坂を想像することは全くできない。

15) これからの五条坂のために

こっちのほうがずっと早くからあったのに、今では、東大路より東を茶碗坂と五条坂だと思っている人も多いようですが…観光客とかは特に。

「うん、そやけど、それ（五条坂）がどこまで（を指すのか）…。」

もちろん僕等も、「そういう運動せなあかん」とは、なってるんやけど。所謂この（11月）19、20日は五条通りから清水道へ上がる自家用車を止めるんですよ（注51）。朝の九時から、夜の五時までね。それと、その次の週と二回やると。そんな時に五条坂を（通らない）。だから皆（の五条坂の認識が）上になってしもうたんですよ。

それから観光バスのガイドさんも、なんかそっから上と言うてるみたいやと。直接聞いてるわけやないから分からないんですけど。

後はタクシーかな。大きいんやったら八坂とエムケーと総合グループかな。そういう申し入れをしたらどうか、とかね。

「こっちも五条坂としてあるんだ」ってことを知らしめる…。

「うん。それから、ホームページとかをあげて、そういう風なことを入れといてとか、そう言うことは最近急に出てきて。」

それでね、（京阪）五条駅は昔は地上にあったの、五条が終点で。その線に延長させて三条まで延ばしたの。その時分は、人通りも多かったし。段々こうなって（地下に駅ができて）人通りがちょっと途切れたりね。その時分は五条も普通しか停まらへんかったの。で、急行停めてもらおうて、この陶栄会と五条会とが、停めてもらおうと運動しはっ

たの。で、藤平の先代とか、平山さんゆうて傘やら靴やら売ってはる…その方やらと、大阪の（京阪）本社まで行ってやっと急行が止まったの。

ほんで一日だけね。特急が止まったの！で、特急が止まった、あくる日からダイヤが変わって…（苦笑）」

あらあ〜。幻の一日ですね。そんな運動があったのは知りませんでした。

「そういうことがあって、急行も停まるようになって、『ここら辺も、ぼちぼち人も通るしええな。』ってなったら、さっきもゆうたように、観光バスがさっと来て、さっと帰って行かはる。ま、ちょっとでも、居てもらえるように考えなあかんってなって。あの、区役所で、いわゆる…。これは国道なんで、京都市が勝手にいらえへん（いじれない）のんで、国土建設省と、ここらの五条会やら、陶楽会やら、清水（寺門前の自治会）さんやら、各学区の理事代表やらそういう人と、大学の先生と、そこらの人呼んで、一年間かけて、いろんなプランを、好きな事いうて、『ここをちょっとでもようしよう。』と思おて。」

それは地下にバスプールを作ろうという話ですか（注52）。

「それはもう一つ前にあった話で、大和大路をもうちょっと西へ（行ったところに）、バスの駐車場作って（という話です）。じゃあ、どこを入り口にすんのや？それによってもものすごう変わってくんのよ。」

でも、もし、そこにバスプールがあって、出口がここらへんにあって、そこからあるいてくれれば、ここの人達にとっては、いいことでしたよね。

「そうそう。でも、それも（プランが）繋がらん、この五条通をもうちょっと改修してもらおうゆうことで。」

で大きいプランは、この電柱を全部地中化して、光ファイバーを通して、今、ぽんと植わってる木いを、ちょっとした花壇にして。で、まあ、それすんのやったら、『ついでにその周りに、ちょっとでも落ち着いてもらえるように、幅の広いあれをして（段差を作って）椅子代わりに使うてもらおうか。』とかね。

そやけど、『そしたら八月の陶器祭りの店をどうするか。』とかね。少なくとも、（出せる店舗が）3分の1になるやろね。だって花壇があるからね。しかも、その奥に自転車道作らなあかんからね。なんか、広いところは自転車道作らなあかんみたいやね。」

でもそういう風にしてしまったら、露店を出すのがとても難しくなるから陶器市に影響が出てくるんですね。

「うん。そやから、花壇の幅とか、色々工夫すんのやけど、まあ3分の1になるわな。『そしたら、360日のお客さんか、4日間のお客さんか。』っていう一つの議論にもなるし。じゃ、ついでに、小川とか流そかとかね。東大路から、川流したらどうやろかとかね。」

音羽川じゃないけど。

「そうそう。好き勝手いってますわ。」

やっぱり、バイパスがあって、せっかくの陶器の町の風情がもったいないって気はしますけどね。

「うん。ほんで、それやったら、そんなに立派なもんはできひんけど、作品を、野外展覧会みたいに並べてみたり。あるいは、電気のトランスが絶対地上にでまっしゃろ。そこに陶板画をはめようかとかね。その許可は出てるんですけどね。」

で、次、今度は、その陶板は作家が作った方がええのんか、職人さんが作った方がええのんか。なんか一つ考えたらね・・・。」

問題がいっぱい出てくるんですね。

「だからひとつもまとまらへん。でも陶板はどうにかしたいとおもってるんやけど。」

おわりに

現在の五条坂の状態は、決して良好とはいえない。勿論、五条坂に軒を連ねる多くの販売店は小売兼卸業を営んでおり、料理店その他への卸が売り上げを支えている部分が大きいようだが、こちらも芳しい状態ではない。

「ここが五条坂だということを知ってももらわなあきまへん。」

私にはこの言葉が、「ここは 400 年続いたやきものの町、五条坂なんです。国道 1 号線東山バイパスに半分食われたって、山の上も、山の麓も、やきものの町、五条坂なんです。無くなるわけにはいきません。」そう聞こえる。

風葬の地であった五条坂が、平氏、北条氏によって開発され、豊臣氏が町民の住む町にした。最初の開発から 800 年以上の年月がたっているにもかかわらず、現在でも五条坂界隈を歩くと、地名や跡から、数百年前のこの地の様子を伺い知ることができる。どんな地域でもそうなのだが、現在の姿になるまでにはさまざまな過程があり、その苦労は極めて大きい。五条坂はその過程の跡が未だはっきりと残っていることが興味深い。

この徐々に、の開発の上に、五条坂は「やきものの町」となり、19 世紀には最盛時を迎える。その歴史は現在に至るまで 400 年以上に及んでいる。

ところが戦時中、その半分が今度は一斉に消え去り、その上に立てられた国道 1 号線・東山バイパスができた。このために、この地は更なる開発が進み、清水へ向かう五条通りが一気に観光道となる。

400 年続いたやきものの町を、国が半分切り取るというのは、驚きを隠せないのだが、その後の大阪と滋賀を結ぶ国道 1 号線東山バイパス（注53）が、京都の産業・関西の産業を支えていることは想像に容易く、五条坂に住む人も、我々もその恩恵を色々な場面で間接的に受けていることは明らかである。

木村さんは「時代の流れだから五条坂が国道 1 号線・東山バイパスになったのはしょうがない。遅かれ早かれ工事をされたでしょう」と言う。しかし、「もし、戦争が早く終わっていたら」、「もし、五条坂が国道 1 号線・東山バイパスにならなければ」、「道の両側に陶器屋が連ねるやきものの町であり続けたなら」、二寧坂・産寧坂のように、観光客が清水寺参拝のついでに「ほな、五条坂通って、やきものみて帰ろか」という土地柄になりえたのかもしれない。

五条坂の上に国道 1 号線・東山バイパスが走り、その周りの人々は大きな恩恵を受けているが、その恩恵に変わるものを五条坂は得ていない。やきものの町の雰囲気を使い、「汚れたら捨てる。飽きたら捨てる」という時代が、京焼・清水焼の価値に見合うだけのお金を五条坂に落としていかなくなってしまった。

400 年のやきものの町を切り取り幹線道路を作る行為も、細かな心配りや、その美しさを追及した京焼・清水焼の売り上げが伸び悩んでいることも、大事なものを壊してまで利便性を追求する風潮の現れであり、それは、日本にとっての、あるいは世界にとっての打

撃である。

五条坂は「やきものの町」としてのアイデンティティーを半分失ったという意味で被害者であり、利便性のためにこの地に国道を建てたという意味で我々は加害者である。しかし、同時に我々は加害者であると同時に被害者なのかもしれない。

この報告書を作成するにあたり、以下の人にお世話になりました。ありがとうございます。
(五十音順・敬称略)

木村隆一・夫人、里見勇三、末広直道、谷口雅紀、田村健夫、湯浅士郎

〔注釈一覧〕

- (注1) 間口が狭くて奥行き深い建物などのたとえ。町屋独特のつくりで、奥行き深い建物ほど裕福な家と言われる。
- (注2) 鳥辺山麓の辺りを鳥辺野と呼ぶ。
- (注3) 京都市『史料 京都の歴史 第10巻 東山区』(平凡社、1987年) p.448 参考。
- (注4) 逆修…生前に予め自分のために仏事を修して死後の冥福を祈ること。
- (注5) 墓守・埋葬を業とする賤民の呼び名。火葬の際、死骸を焼いた。
- (注6) 中世の京都五箇所の大規模な火葬場は三条河原(中京区西大路三条)、四塚(南区)、千本(北区蓮台野)、中山(左京区吉田)、延年寺(鳥辺野墓地)と言われる。
- (注7) 竹村俊則『昭和京都名所圖會 1 洛東一上』(駸々堂出版、1980年) p.152 参考。
- (注8) 「元禄7年建立。正式名称は浄土真宗本願寺派本願寺大谷本廟。宗祖親鸞の墓所であり、浄土真宗門信徒の墓地が立ち並ぶ。」注3 同文献 p.280、及び『本願寺ホームページ』
<http://www.hongwanji.or.jp/> (Copyright 1998-2005 Hongwanji, 2005年12月19日検索) 参考。
- (注9) 注7 文献 p.281 参考
- (注10) 五条坂を少し北に上がったところに位置する真言宗の寺。963年に空也が創建したといわれる。多くの重要文化財が保存されており訪れる観光客も多い。
- (注11) 「六波羅」という漢字は六波羅蜜寺から来ている。「六原」は江戸以降の表記である様だが、現在では「六波羅蜜寺」「六波羅探題」など歴史的意味を持たせたいときは「六波羅」と表記し、「六原学区」のように、単純に地域を指す場合は「六原」という漢字を用いることが多い。
- (注12) 注3 文献、p.252 より引用。
- (注13) 京都市(編)『京都市 地名・町名の沿革』(京都市、1995年) 参考。
- (注14) 承久3(1221)年、後鳥羽上皇が鎌倉幕府の討滅を図って敗れ、かえって公家勢力の衰弱、武家勢力の強盛を招いた戦乱。
- (注15) 上級武士に下屬して家臣化した下級武士。
- (注16) 注3 文献、p.28 参考。
- (注17) 建築、土木工事の意。
- (注18) 注3 文献、p.408 参考。
- (注19) 地震や火災で何度も崩壊し、その度に再興が計られてきたが、ついに昭和48年3月27日の夜の火災で大仏殿は全焼、当時木像半身の大仏像も焼失した。(写真2)
- (注20) 年代は『京町鑑』(安藤八左衛門、1762)による。この資料は『京都叢書』(京都叢書刊行会、1915)を参考した。
- (注21) 「今時の同文献に二条城、むかしきづかれたる時に、町小路有しを、気づくにつきてうつされたり。大仏三十六町の町これ也。」掲載『橘窓自語 五巻』に記されている。この資料は注2 文献、p.438を参考にした。
- (注22) 藤岡幸二(編)『京焼百年の歩み』(財団法人京都陶磁器協会、1962年) p.4—5 参考
- (注23) 鳥辺山南に位置する山。京焼・清水焼産地の日吉がある。
- (注24) 京都府立総合資料館(編)『京都府百年の資料2 商工編』(京都府、1972) p.713 参考
- (注25) 注3 文献、p.409 より引用。
- (注26) 13 文献、p.134に「又西大谷門前を南へ行ば牢の谷といふ所への道也。」とあり、寛保2(1742)年の『増補板京大図』にも「ろうの谷」と記されていることから、18世紀半ば以前からこの地をろうの谷と読んでいたことが分かる。牢獄が本当に存在したかは不明。

- (注27) 注3文献、p33参考。
- (注28) いつ頃から「つんぼ谷」と呼ばれていたかは定かではないが、昭和時代まで呼ばれた地名であり、比較的近年の呼び名であると考えられる。
- (注29) 注3文献、p41参考。ただし、この文章中の「五条坂」の範囲は特に定義づけがされていないので、東大路を超えた五条坂も含まれると思われる。
- (注30) 柳町敬直『京都の大路小路』(小学館、2005年)p.262より引用。
- (注31) 大管直「7街路はいかに造られたか」高橋康夫・中川理編『京・まちづくり史』(昭和堂、2003年)p.201—p.202より引用。
- (注32) 昭和20年1月16日夜の東山区馬町が空襲された。死者は41名。
- (注33) 1932年大阪の主婦らにより発足した女性団体。陸軍支援のもと女性の戦争協力機関として活動。
- (注34) 空襲に備えるため、消防組と防空を担当する防護団とを統合した団体。1939年結成、47年廃止。
- (注35) 「建物疎開」とも呼ぶが、一般には「強制疎開」と呼ばれている。本稿ではその内容も考え、後者の表現を用いる。
- (注36) 「新しい五条通りは幅員50mで、中央に12mの植樹帯を置き、13mの車道と6mの歩道が両方に設けられた。」建設局小史編さん委員会(編)『建設行政のあゆみ』(京都市建設局、1983年)p.39より引用。
- (注37) 注31文献p.203より引用。
- (注38) 用地買収が終わるのは30年度末であった。
- (注39) 「京の新動脈」『京都新聞』(昭和42年4月20日夕刊)より引用。
- (注40) 木村隆一氏に対するヒアリングを編集した。構成上、述べた内容の順序は書き換えている。鍵括弧で括弧してあるのが木村氏の発言内容、三字送りにて記述しているのが上野、小林の発言内容である。(2005年11月7日実施、取材者：上野、小林、テープ起こし：小林)
- (注41) 東山五条北西角に京都市が立て札を立て、五条坂を紹介している。これによると、「五条坂 この立て札の立っているところを中心にして、西は大和大路まで、東は坂を上って、清水坂にいたるまでの間を五条坂という。」とある。
- (注42) 年少者が職人または商人の家で修行し、一定の年季を経て初めて一人前になったという制度。
- (注43) 「京焼についてのアンケート(卸売業者)を参照。
- (注44) 空襲に備えるため、消防組と防空を担当する防護団とを統合した団体。
- (注45) 平時は民間にあって生業につき、戦時・事変に際しては、必要に応じて召集され国防に任ずべき、予備役、後備役・帰休兵・退役などの軍人。
- (注46) 天明元年(1781)創業の老舗中の老舗。現在の(株)公益社中央ブライトホール(五条大和大路北東角)の地点にあったが、今は五条を離れ泉湧寺にて商いをされている。萬殊堂が五条から消えたことを嘆く陶磁器業関係者は多い。
- (注47) 五条坂で化学陶器を製作していた。詳しくは7章の石川晃報告を参照。
- (注48) 五条通本町通東北にある旅館。
- (注49) 京焼・清水焼は家内制手工業であるため、一つの登り窯に数社が一緒に窯詰めをすることが多い。共同で使う窯に製品をつめに行くことを出窯という。
- (注50) 鳥辺山より南に位置する清水焼・京焼の生産地。
- (注51) 秋の観光シーズンがピークを迎える中、マイカーによる道路渋滞を解消しようと京都市と地元自治会が11月19、20、26、27日朝10時から夜五時まで、五条坂を通り清水寺に行こうとする自家用車を実験的に規制した。徒歩での参拝者は「歩きやすくなった」と言い、タクシー運転手や地元住民は「渋滞が緩和された。」言っている。一方、門前近くの駐車場経営者は「いつもの10分の1しか売り上げが無い。」と言い、陶磁器小売店店主は「重たい陶磁器を買うのは車で来る参拝者だから商売あがったりだ。」と言っており、地元関係者にとっては賛否両論であるようだ。
- (注52) 2000年頃に五条坂の地下に駐車場を作るという計画案があった。資金不足のため計画は停滞している。
- (注53) 東山バイパスは西は五条坂から、東は山科四ノ宮まで伸びる。

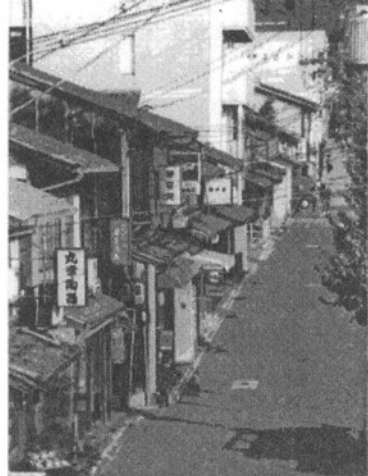


写真1 (左)「五条坂北側」
2005年11月7日に報告者が撮影した。「東萬古堂」前の鉄橋から五条坂北側を西から東へ臨む。

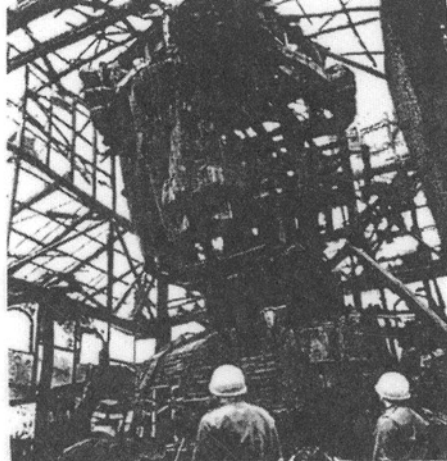


写真2「方広寺大仏火災」(右)
京都市役所発行『ひととまちの歩み』(1999年)p.23より抜粋。
「昭和48(1973)年3月27日の夜に出火、大仏殿を全焼し、めずらしい半身の大仏像も消失した。」とある。



写真3「烟になっていた五条坂」
写真2同文献p11より抜粋。昭和24(1949)年頃の撮影。



写真4「舗装され、春の観光シーズンを迎える五条通」
写真2同文献p.11からの抜粋。昭和29(1954)年頃大和太路通の辺りから五条坂南側を撮影したと思われる。



写真5「現在の五条坂1」
2005年11月25日に報告者が撮影した。「東萬古堂」前の鉄橋から国道1号線を東から西へ臨む。

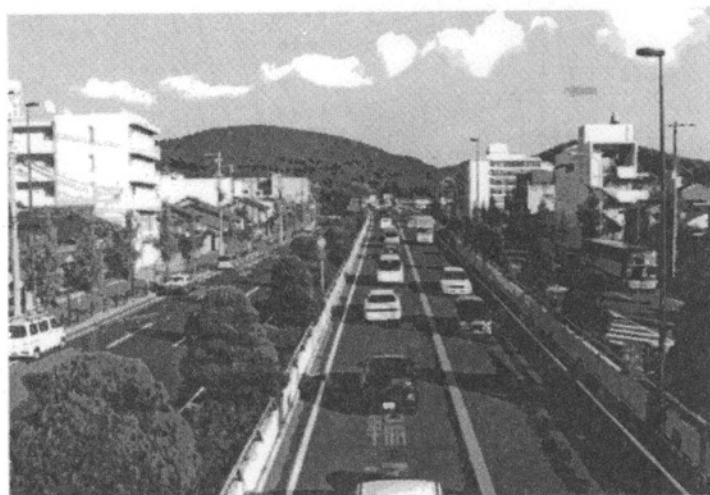


写真6「現在の五条坂2」
2005年11月25日に報告者が撮影した。写真5撮影地点から東山バイパスを東へ臨む。



写真7「五条坂東大路西入付近」
写真2同文献p20からの抜粋。昭和38(1963)年撮影。
「牛車がのんびりと進む風景も珍しくなかった。」とある。
馬車ではないが木村氏の話す雰囲気に近いものを感じられる。

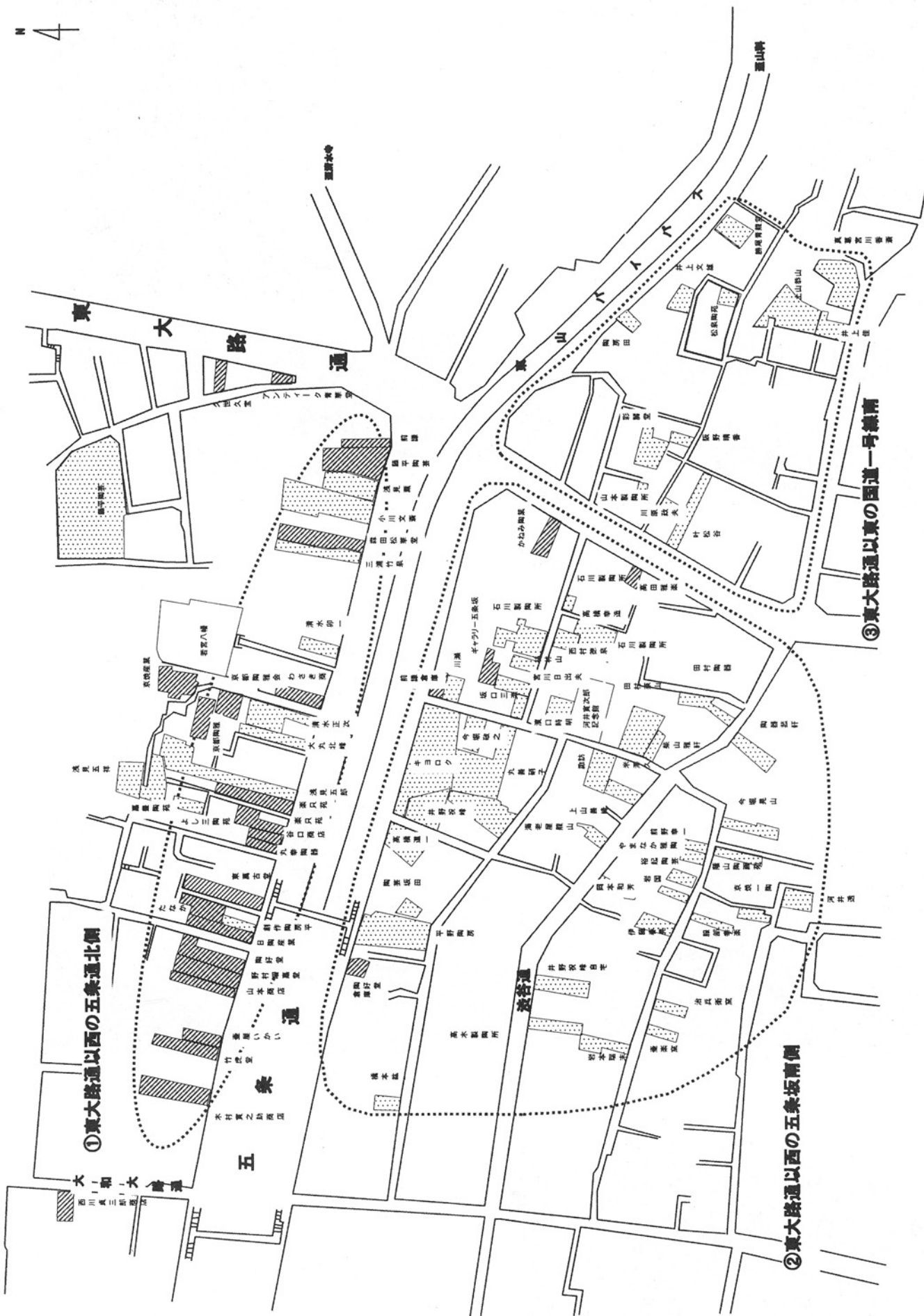
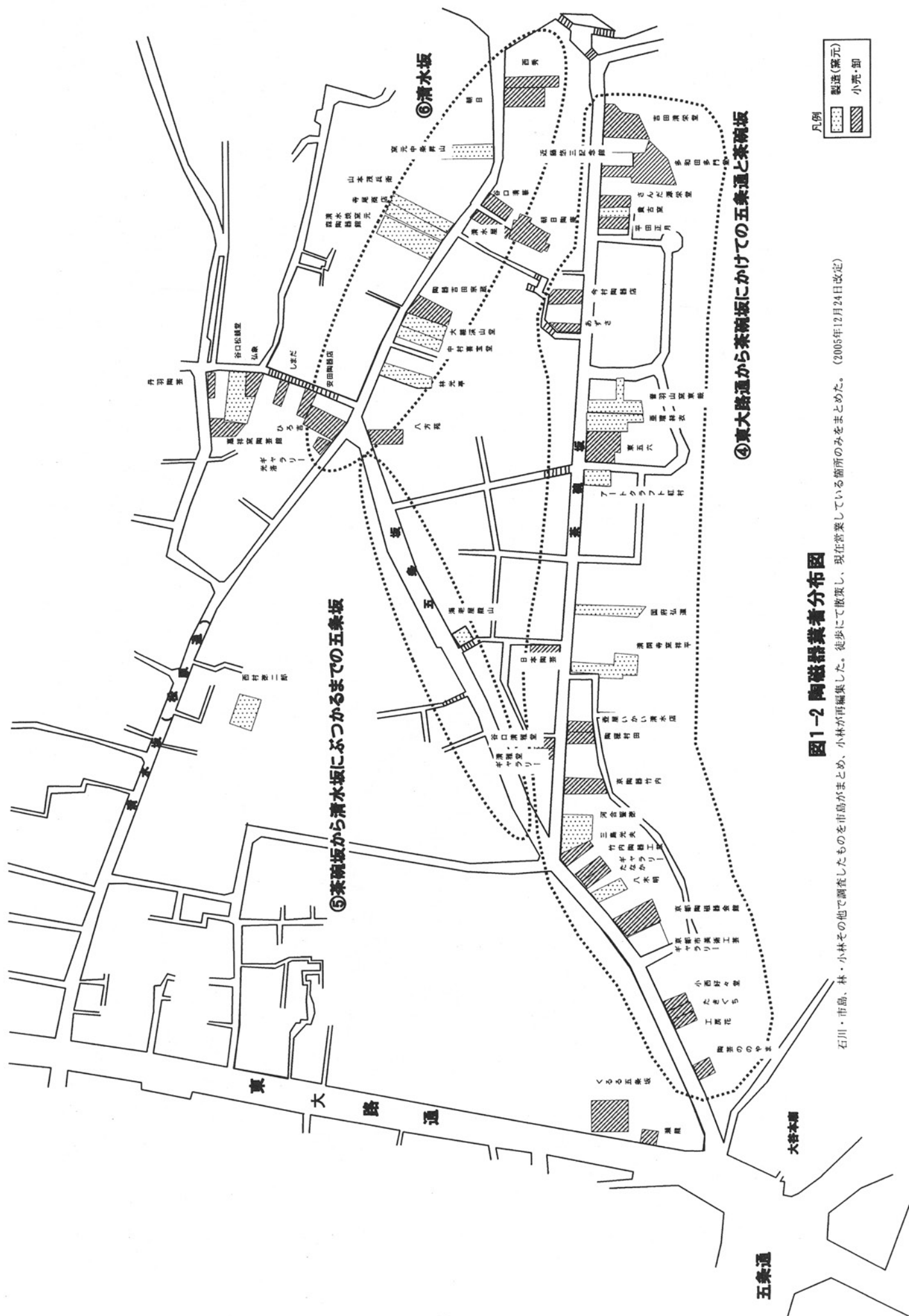


図1-1 陶磁器業者分布図

石川・市島、林・小林その他で調査したものを市島がまとめ、小林が再編集した。徒歩にて散策し、現在営業している箇所のみをまとめた。(2005年12月24日改定)

凡例

製造(窯元)	脚・小売
製造(窯元)	脚・小売



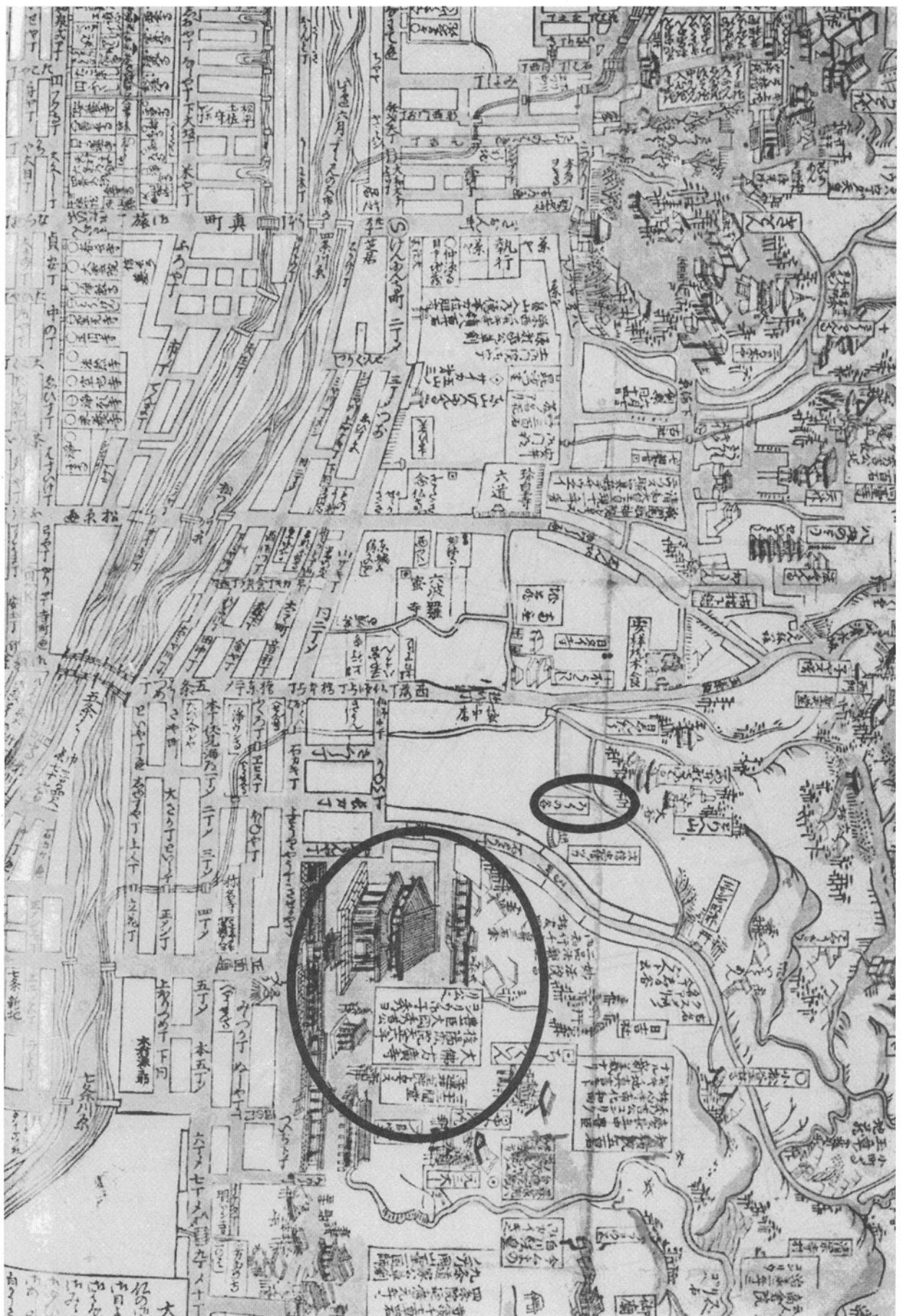


図2 大佛方広寺と「ろうの谷」

林吉永版『増補再板京大図』（寛保2（1742）年）より一部抜粋。

この資料は、高橋康夫（編）『京・まちづくり史』（昭和堂、2003）を参考にした。

三十三間堂の倍以上の大きさで描かれており、京都における大仏殿方広寺の印象の大きさをうかがい知ることができる。



図3「建物疎開の分布」

「太平洋戦争と京都」足利健亮（編）『京都歴史アトラス』（中央公論社、1994年）掲載地図、「建物疎開の分布」より一部抜粋。昭和19（1944）年から昭和20（1945）年に建物疎開指定地区を黒く示してある。東大路にぶつかるまでの五条坂南側が一直線に疎開地区に指定されている。



図6「東山区小学校校区図」

『ゼンリン住宅地図京都府京都市東山区』（ゼンリン、2005）p14より一部抜粋。



図7 五条坂周辺の学区

京都市企画調整局情報化推進室情報統計課（作成）
「京都市の国政統計区地図」（京都市、1995年）より一部抜粋。
貞教学区と修道学区がまだ残っている。

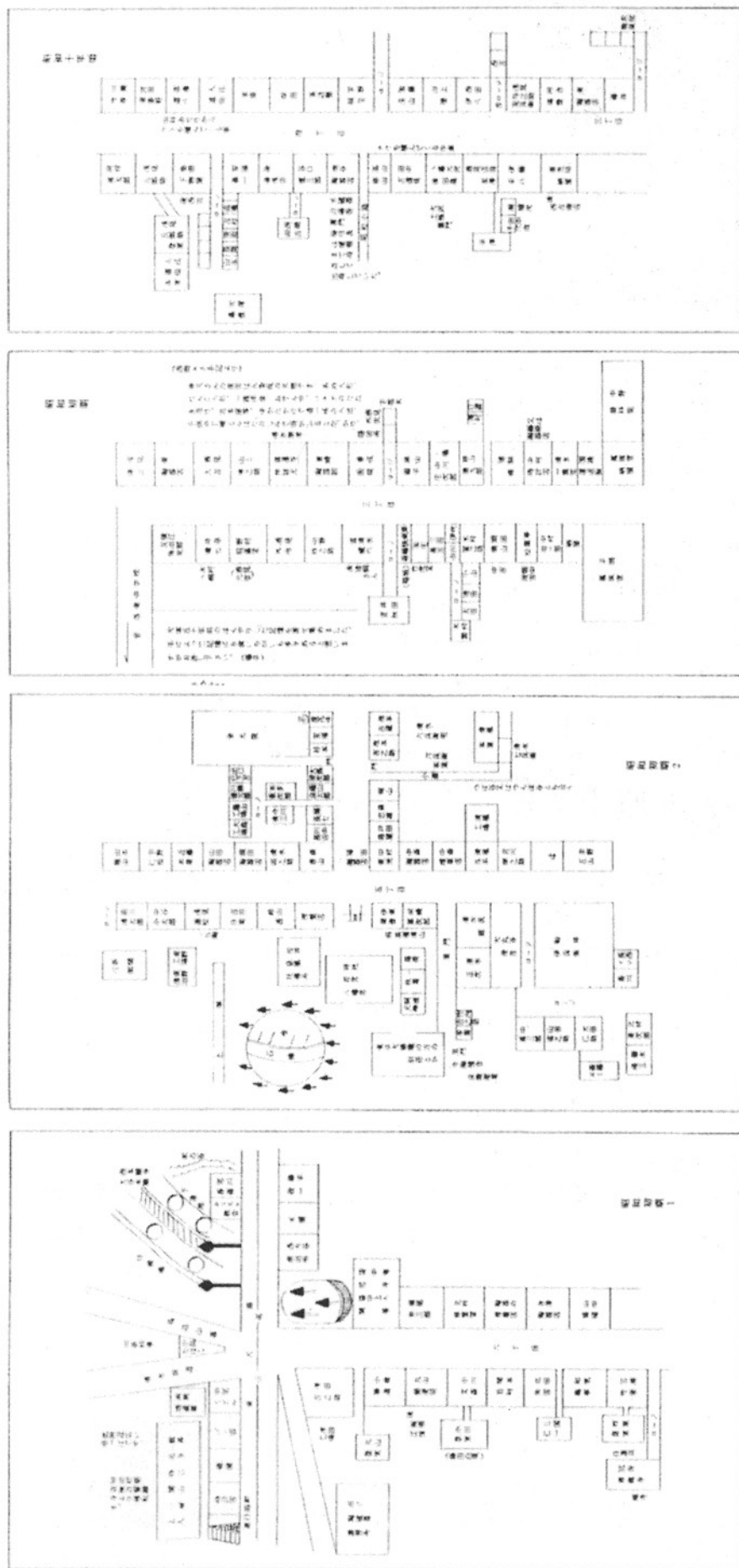


図4 昭和初期の五條坂

藤平長一『思い出の五條坂』（五條坂陶業会、1981）p47—p52より抜粋。
 各丁ごとに昭和初期の五條坂の町並みを記してある（*6丁目が一番東で、3丁目が一番西。編集上、各々の地図の左が五條坂北側、右が五條坂南側になっている）。これによると五條坂南側にも多くの陶器屋が並ぶ。当時の五條坂南側には、北側と同じ、あるいはそれ以上に立派な陶器屋が立ち並んでいた、と言われている。

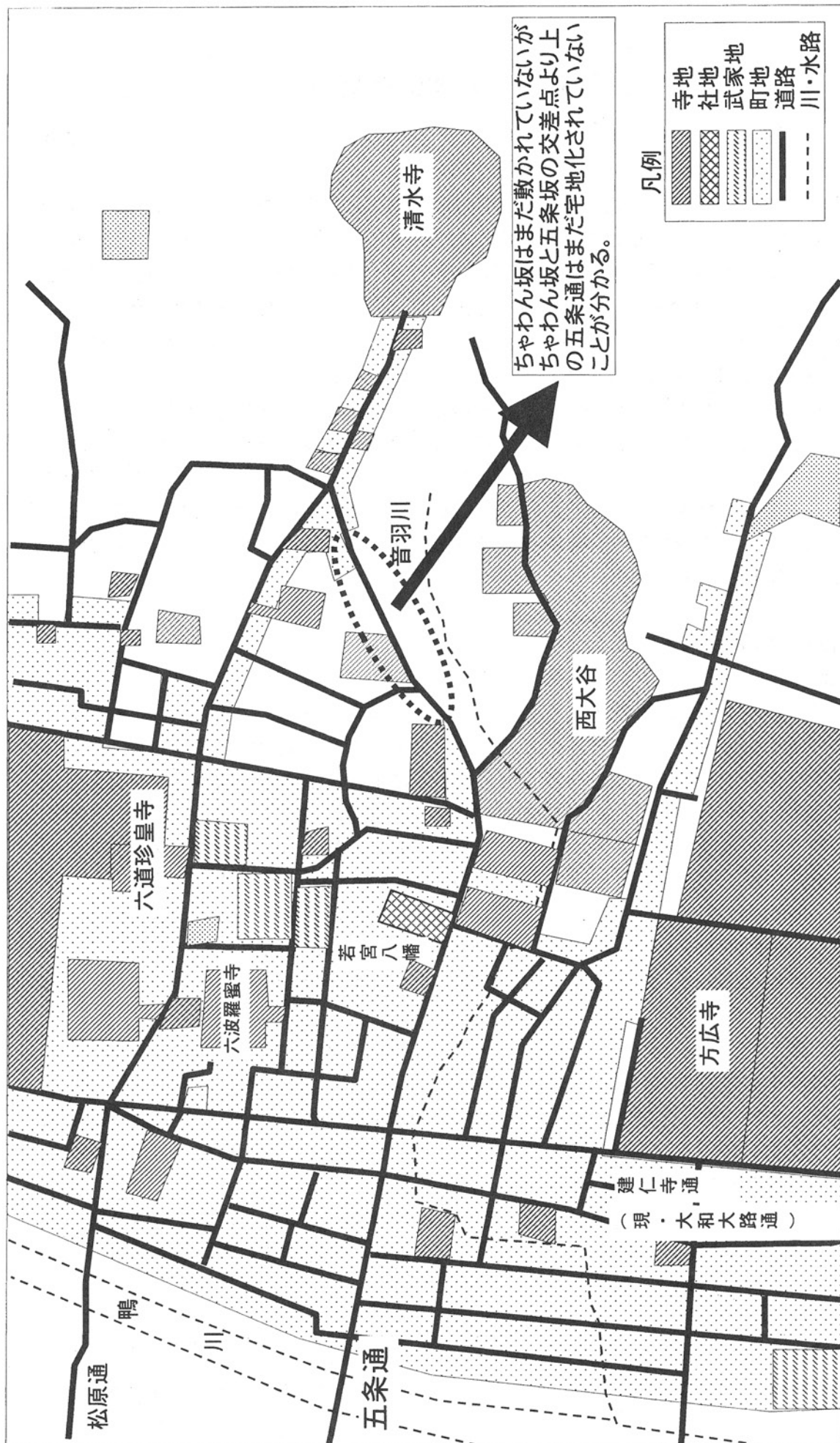


図5 「明治期の五条坂界隈の土地利用の状況」

明治時代の五条坂界隈の土地利用の状況について、『京都の歴史』編集会議（編）、「現代都市—京都の模索（明治）」『地図に見る京都の歴史』（学芸書林、1976年）を参考に作成した。